る。次に江戸時代の茨木は天領や高槻藩主永井氏の所領をはじめ入組・変動が激しい地域別の領主の変遷表だけで四頁に及んでいる。この複雑な領有関係を七つの類型に区分し、これを色分けした所領配置図が別刷で附けられている。さらにこれら領主を藩主・旗本・天領の別に考証している。この分析や附図は、最近の天領・旗本領の歴史地理学的研究にとって貴重な素材となるだろう。続いて幕藩領主の支配政策として寛永・寛文の地改め、延宝検地、水利整備、貢租内容、農民統制等の叙述でこの章は終わっている。第六章は「近世産業の展開」で、安威川沿いの水論や、一八世紀末にはじまる寒天業など農林商工の諸産業にふれ、近世後期の農村構造の変化が述べられる。すなわち一方では中農層が土地・貨幣を集積し、他方で貧農が没落、年季奉公人を放出し、富農経営が発展する。そして幕末に藩財政の窮乏から幕藩制の危機に至るといふ第七章「近世文化と庶民生活」に移ると、当地は高山氏の影響でキリシタンが多く、弾圧後ともいゆる隠れキリシタンの伝統が続ぎ、多くの遺物が紹介されている。また

宗竜王山をはじめ雨乞信仰に関するもの、宗

門改帳による家族制度の分析などのほか、寒天屋節の紹介がある。山間の寒天作業時にうたわれた民謡で、幾系統も残されている節が採譜され、うち三曲の楽譜が掲載されているが、これは地方誌編集では珍しい試みであろう。

第八章「明治維新と茨木地方」は明治二〇年頃までの行政区画の変遷、地租改正、小学校の沿革や統計、殖産興業等に関する叙述が豊富な史料にもとづいてなされている。町村制施行後敗戦までを扱ったのが第九章「地方自治の成立と戦時体制」で、行政・教育・経済・文化の各分野がもれなく扱われ、米騒動後の小作争議にもふれている。戦後を扱った第一〇章「茨木市の成立」は一章としては最も多くの頁数があてられ、七節からなっているが、うち第六節が「市民生活と市民運動」にさかれている。阿武山原子炉設置反対運動をはじめ組合運動・平和運動・部落解放運動などの他に万博市民運動まで紹介されている。万博ムードに傾く茨木市の中に流れる市民の声を反映して特色ある項である。

巻末に「史料編」として八九点の文書が載せられており、うち五〇点近くが中世の

ものである。とくに「常称寺所蔵文書」の総持寺領の諸帳は貴重である。文和元年「総持寺領散在田畠目録写」、文安二年「総持寺散在所領取帳写」、天正七年「総持寺領名寄帳」の三点で、本文でも分析の結果が叙述されている。その他「永昌記紙背文書」から垂水東牧関係文書が四点、忍頂寺関係では「仁和寺文書」から一〇点ほどが掲載されている。

以上、詳細・堅実な内容を編纂開始後二年足らずの間に、史料の探訪・整理とあわせて書き上げた編集委員の方々の労はひとかたでなかつたと思われる。

（A5判 本文六九二頁・史料編八七頁）
（昭和四四年六月 茨木市役所刊）
（村田修三）

竹内理三博士還暦記念会編

律令国家と貴族社会

荘園制と武家社会

この二著は、竹内理三博士の還暦と退官を記念して編纂された論文集である。竹内博士は明治四〇年愛知県知多町岡田の生まれ。半田中学校・八高を経て昭和五年東大

国史学科卒業、同時に史料編纂所に入られ、昭和二三年から一〇年間は九州大学教授として九州に赴任、昭和三四年から再び史料編纂所教授、ついで退官までの二期同所長の要職を重ねられた。この間昭和四十三年まで、史学研究会評議員に就任されている。

竹内博士の学問上の御功績については、いまさら紹介するまでもないことであるが、主著『奈良朝時代における寺院経済の研究』『日本上代寺院経済史研究』『寺領荘園の研究』『律令制と貴族政権』などに代表されるように、日本古代・中世の政治史・経済史について、精緻な実証研究の上に立つ多くの業績をあげられている。これら研究業績もさることながら、竹内博士の御功績をいやが上にも高からしめるものは、『寧楽遺文』三巻、『平安遺文』十二巻を編纂公刊されたことである。全国に散在する文書史料を網羅して集成することは、容易な事業ではない。卑近な想出を記して恐縮であるが、過年高野山史研究会にて私は博士と同席するの榮に浴したのであるが、その節、たしか西南院の文書の一部を撮影して差上げたことがある。当時技術的に甚だ未熟であった私の写真は光線は片寄り、加う

るにDP屋のミスもあっていざさかオーバ一気味にて何とも様にならない代物であったが、博士は「ナニニ判読できれいなインですよ」とのお言葉、私自身大いに赤面するとともに、まさに史料の鬼とも申すべき博士の偉容にうたれた次第であった。博士は長らく史料編纂所に在職せられたにしても、文書史料の全国的な網羅集成には言語に絶する労苦を重ねられたと察せられるのであり、博士にしてはじめて成就し得た、未曾有の大事業である。その完成によって、今や私どもは、奈良・平安時代の全国の文書を、座右に備え得るにいたり、奈良・平安時代史の研究は、文字通り画期的に前進することとなった。

博士の門下・同学及び関係者の寄稿によって編纂されたこの記念論文集は、博士の学問と学界への功績を記念するにまことにふさわしく、いずれもが精緻な実証をふまえた、珠玉の論考からなっている。簡略な紹介が、かえって真価を損うのをはばかって以下目録をかかげるにとどめるが、博士には今後ますます御壮健に、御研究を進められるとともに、長く私ども後進を御指導いただくようお願い申し上げる次第である。

『律令国家と貴族社会』

推古朝冠服小考

冠位十二階と皇親

不改常典考

行基年譜、特に天平十三年記の研究

正倉院文書正集第三巻について

——接続の一例——

資に関する二、三の考察——古代税

制史の一側面——

食封制と公民制

家・戸・保

公田をめぐる二つの問題

征隼人軍について

大宰府の徴税機構

弁官についての覚え書——八世紀〜九世紀半ばの実態を中心に——

日延の符天曆齋来

民族と神社

小一条院（敦明親王）考

平安中期の警察制度

公田官物率法の成立

院宮分国と知行国

後伏見上皇院政辞退申出の波紋

——西園寺実兼の一消息をめぐって——

川副 武胤

宮本 救

田村 円澄

井上 光貞

土田 直鎮

直木孝次郎

時野谷 滋

岸 俊男

虎尾 俊哉

山田 英雄

平野 邦雄

野村 忠夫

桃 裕行

池辺 弥

山中 裕

上横手雅敬

坂本 賞三

橋本 義彦

辻 彦三郎

『莊園制と武家社会』	安田 元久
地頭の「対桿」と「抑留」	飯田 久雄
平氏と九州	
延暦寺衆徒と佐々木氏——鎌倉時代	黒田 俊雄
政治史の断章——	
鎌倉幕府の鎮西統治に対する抵抗と挫折	瀬野精一郎
若狭国における莊園制の形成	網野 善彦
東寺領若狭国太良荘の均等名について	渡辺 澄夫
莊園領主経済の諸段階	佐々木銀弥
鎌倉時代における伊予国の地頭御家人について	田中 稔
薩摩国伊集院の在地領主と地頭	五味 克夫
九州諸国における北条氏所領の研究	石井 進
九州莊園年貢の輸送について	新城 常三
永仁徳政と越訴	笠松 宏至
鎌倉末期周防国衙領支配の動向と大内氏	松岡 久人
豊前国宇佐宮の境内十郷	中野 幡能
遠江・駿河守護今川範国事蹟稿	川添 昭二
茂木氏給人帳考	永原 慶二
豊臣時代の武家社会と文化	河合 正治

〔法令国家と貴族社会〕A5判六二八頁・『莊園制と武家社会』A5判六一二頁 共に昭和四四年六月 吉川弘文館刊 定価各三、五〇〇円 (熱田 公)

M・ベンジク／S・ホイヤー共著 瀬原義生訳

ドイツ農民戦争

西ドイツでは第二次大戦後宗教改革史関係の研究書は無教といつてよい程現れているが、農民戦争の研究は皆無に近い。それに対して東ドイツでは農民戦争は研究の最も活潑な分野の一つをなしているが、この対照は東西両ドイツの研究関心の相違をあげざやかに示しているといえよう。マルクス主義を基本とする東ドイツの歴史学界では、宗教改革も政治的社会的革命運動の一環としてとらえられ、したがって宗教改革そのものよりも農民戦争が重要視される結果となつていのである。一九六五年に刊行された本書の原書は、東ドイツにおけるそのような農民戦争研究の最新の成果の一つである。

しかし本書はいわゆる研究書ではなく、

農民戦争の経過を詳細に叙述した概説書である。とはいへ、わが国ではこの種の書物はエンゲルスの「ドイツ農民戦争」以外にはなく、書かれて以後一世紀以上たつそれは、唯物史観の古典という意義を持ちつつづけているとはいっても、事実関係ではその後の研究で訂正さるべき箇所を少なからず含んでいるので、最新の研究成果に立つ本書の訳訳は、農民戦争に関心をもつ者にとって大いに役立つであろう。本書の特色の一つは、いうまでもなくマルクス主義の立場から書かれていることであるが、戦後東ドイツやソヴィエトの歴史家の間で用いられた「初期市民革命」という概念で農民戦争をとらえ、また階級関係の観点では、一揆軍の中に穏健派と急進派が存在したことを明らかにすべく努力しているところに、その新しい傾向が表れている。エンゲルスによつては農民戦争は「最初の市民革命」とされ、また一揆軍は平板に平民的反对派とされてきたが、これは基本的にはエンゲルスの見解を継承しつつ、その修正を意味している。本書の特色の第二は、軍事史シリーズの一冊として出されているところから、農民戦争の軍事的側面に力点をおい